

「個別の指導計画」最終報告会



分かる授業における手だて

—個別の指導計画と関連づけて—

高等部

平成22年1月28日(木)



骨子

- 生徒の実態
- 板書
- 問いかけ
- 教材
- 生徒の活動
- 授業での留意点
- 言語の定着
- 苦手意識で集中力に欠ける生徒への手だて
- 評価・確認
- 今後より必要なこと
- 手だてのキーワード



生徒の実態 ①

定着方法 到達度 確認 分かりやすさ 意欲

- 学習態度は良く、熱心に取り組んでいる。
- 繰り返し練習問題をやっているが、教えたことがなかなか定着しない。
- 意外な所を取りこぼしている。そこを補いながら進めるため、多くの時間を要する。
- 本は読めるが、内容理解が不十分だったり、時間がかかったりする。
- 基本はある程度理解しているが、応用力がない。
- 文章を自分自身でまとめることが苦手である。



生徒の実態 ②

- 主体的に活動できない。受け身的。
- 集中力に乏しい。 その時々^の心身の状態が変わる。
- 「分かった」と言っても、分かっていないことが多い。
- いろいろなコミュニケーション方法をとっても伝わりにくい、もしくはきちんと伝わっていないことが多い。

- 個人差が非常に大きい。
口話中心の生徒、手話中心の生徒等コミュニケーション方法の多様化。
生徒の障害の重度化、多様化。



板書 ① 書き方・表示方法

分かりやすい ポイント表示

- 分かりやすく丁寧に、文字をきれいに書く。
- ポイントを簡潔に書く。
- 大事なところは線を引く。
- 文字や線の色分け。
- 色等も変えてより分かりやすい文や図の表示。
- プロジェクタ、パワーポイントを使用。パワーポイントで説明を行う際には、生徒の視線が集中するように立つ位置に注意する。（スクリーンの前）

板書 ② 留意点 (教科・生徒により

様々)

学んだ内容が分かることが大切

- 視覚的に分かりやすく。
- 教科書等で省略している部分を特に詳しく。
- 発問したこと、ポイントなどを板書。
- できるだけ教科書に忠実に分かりやすく。
- 頭の中が整理できるようなレイアウトで。
- 半面に1テーマずつの板書。ポイントを整理しまとめた拡大コピーをあらかじめ用意し、1時間の授業内容は一面にまとめるようにする。最後に”眼”で確認するため。
- どこに何を書くか。書いた内容を出来るだけ消さない工夫。
- 拡大コピーを黒板代わりにして書き込み、次の授業時に復習で用いるようにしている。
- 残すもの、消すものをはじめから考えながら書く。(授業の最後に大事なポイントが整理出来るようにしておく)



問いかけ ① 方法

丁寧さ イメージ化

- 丁寧な説明。
- 生徒に応じて分かりやすい伝達手段を使用。
- 生徒に応じた分かりやすい話し方。
○イメージ化の工夫。(写真、映像、体験、具体物等使用)
- 分かりやすい問いかけと具体例を含んだ問いかけ。(回りくどい言い方ではなかなか理解が難しいため)
- 考えられる問いかけ。(ヒントを多く準備)
- 生徒が知らない語句であっても、まずはそれを使っての問いかけ。(易しく言い換えてばかりだと、新しい語が入らないから)
- 理由を考えさせるような問いかけ。
- 前時の事柄を思い出させるような問いかけ。



問いかけ ② 留意点

自信 楽しい 考えさせる

- 苦手意識がある生徒には少しでも自信がもてるような配慮が必要。楽しい授業を進めていく。
- 板書をして確認してから問いかけを行う。
- 以前に習ったことに関連づけられるように、中学部の教科書等に目を通しておく。
- 問いかけに対して、「分からない」では済まさないで、調べることや振り返りのヒントを与える。
- 理解が充分でないと思われる生徒へ問いかける。
- 質問をしてから解答までに時間を要する生徒には、先に指名しておき、他の生徒の答えを聞いてから再度質問する。二人いる場合は必ず二人に聞き、自分の考え方が正しいかどうかを考えさせる。



教材

視覚に訴える 分かりやすい 能率を向上

- 視覚教材を多く使用。（復習にも使用可）
公式等大事なところをまとめたカードや掲示物。
単元の内容を分かりやすく要約した掲示物。
教科書の拡大コピーや手書きの模造紙。
具体物や図表や写真等。
DVDやインターネット等の画像等の活用。
パワーポイント等を使ったプレゼンの教材。
段ボールで模型（実物大）づくり。（図面での予想と
実際の大さを比べて確かめる）
- 教科書準拠の問題集を使用するが、生徒にあった自作の
プリント。



生徒の活動

見通し 主体性 考えさせる

- 学習内容と学習の流れを提示し、見通しを持たせる。
- はっきりと正しく発音させることを意識させる。
- 手話と口形、声の大きさを意識させる。
- できる問題提示による苦手意識の軽減と授業への継続した集中力を持たせる。
- 発表を多くさせる。
- 結果を予想させる。
- 理由を考えさせる。
- 生徒間のやり取りを大切にする。
- 例題等で時間がかかりすぎない配慮。



授業での留意点①

集中力 確認 考えさせる

- 結果を先に述べてから経緯を説明する。
- 授業の中でも集中させる時間とその後の少し気を緩める時間を作り大切なところに集中させる。
- 平易な言葉（本人のもっている言葉）で、理解を確認しながら授業を進める。
- 自分で考えることができるような時間をとる。
- 生徒が考える工夫（英語：単に日本語訳するのではなく、生徒が内容を推測する。）
- 生活とのマッチングに心がける（現代社会）
- 生活の中で使ったりするものを取り出し、教科の内容と関連づけて指導する。



授業での留意点②

具体性 主体性 ポイント数

- 自分の体験に基づいたと思われることがあったら例に出して、出来るだけ抽象的にではなく、具体的に考えられるよう働きかける。
- 図等を使って言葉だけの説明にならないようにする。
- 全て教えるのではなく、自分で考え調べる等自主的な授業にする。
- 手話（指文字）から 書き言葉（読み）への転換、相互変換をする。
- 1時間の中に大事なポイントを入れすぎない。
- 写真が多く載った本やインターネットなどの図解を示して製作手順などを説明する。



言語の定着 ① 方法

わかりやすく 意識をもたせる

- 単語や熟語などは、各単元において、確認の小テストをして、少しずつ定着させる。
- 英語のリスニング教材は事前に文字化する。
- 漢字はまず生徒の読みを聞き、その後ふりがなをつけ、確認する。
- 漢字には読み仮名をつけさせる。
- 発音等ははっきりしない時は聞き直し意識させる。
- 音読させることで読み方や文書の流れを意識させる。
- 難語句だからといって、分かりやすく言い換えず、とにかく使う。（意味を説明し、繰り返し使うことによって獲得させる）
- 体験に基づいたことで定着を図るようにしている。（ただ単に説明するだけでは把握しづらいように思う）



言語の定着 ② 方法

イメージ化 繰り返し 確認

- 言葉をイメージ化する工夫。
- 授業を振り返らせる。
- 定着しにくいと思われることばは授業の終わりで再度確認。
- 宿題を通じて学習を振り返らせる。
- 声に出させることで、ことばと意味を定着させる。
- 繰り返しの学習。
- 学習内容が分かりやすいノート作り。
- 身についたかどうかの確認。



言語の定着 ③ 教師の意識として

- 自分の思いを素直に出せなかったり、不十分な表現によって相手に誤解を招いてしまう場合がある。自分の思いを正しく伝え、また相手の気持ちを踏まえた表出ができる力の獲得が必要と考える。
- 聴覚障害者が自分のもっている言葉を駆使して積極的に表現し、わかり合えるという実感をもちながら話したり、周囲とのコミュニケーションを取っていくことを習慣化させなければならない。
- 表現における問題点は、言語力の不足からくる理解の曖昧さにある。様々な場面での生徒の理解について、指導者の慣れなどからその問題点を見逃しがちになることがあるので、その場での確認を通し、定着を図っていく必要がある。



苦手意識で集中力に欠ける生徒への手だて ①

ほめる 自信 興味・関心 楽しく

- 出来たことに対しては大げさすぎる程誉め、「まんざらでもない自分」「自信」を持たせ、次の取り組みにつなげる。
- 興味関心のあることから発展させ課題につなげる。
- メリハリをつけて、生徒の興味を持続させる。
- 生徒が活動できる時間を作る。
電子辞書での意味調べ、資料や図などの色づけ（地理）
- 内容は難しくても楽しい授業を！
- ゲーム等を入れ楽しみながら学習する。
- 個人ではなくできるだけグループ活動をさせる。
- 英単語にルビをうつ。キーセンテンスは丁寧に。（英語）



苦手意識で集中力に欠ける生徒への手だて ②

個々の集中力に合った方法 やる気

- 苦手意識を解消させるための具体的な方法を指導する。（覚えられないのなら書く練習、分からないことを調べる癖をつけさせるなど）
- プレゼンで色だけでなく、動きも多用する。教師が動かすのではなく、生徒にも動かしてもらおう。
- 50分同じ単元で集中できにくいときは、2つの単元を準備し、取り組みを変える。→気分が変わって集中力が保たれる。
- 自ら製作したいものを考え取り組む。
- 学習内容と学習の流れを提示し、苦手な意識の軽減と授業への意欲を持たせるようにする。
- 目標を具体的に提示して、その目標に向かって自分ができることは何かを具体的に考えさせる。



評価・確認

生徒自身が気づく

- 簡単な文章であっても、言葉の意味、読み方を本人に確認する。
- 説明したことが理解できているか、復唱させる。
- 声に出して音読させ、漢字の読み方を意識させる。
- 1つの単元が終了したときの確認テストの実施。
- 実技のあと、自分の行った製作過程を振り返り、感想を述べたり反省点を出したりする。
- 短時間でまとめられるように穴埋め式のプリントをさせる。



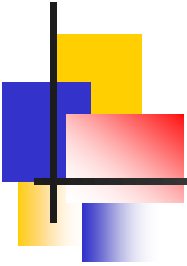
今後、より必要なこと ①

- 「分かる喜び、楽しさ」を感じることでできる授業づくり。
- 板書する時間を省くための工夫。
- より豊かな表現をするためにも、より高い正確な手話表現をつけること。
- 教科指導力の向上。
- 生徒が意欲を持って主体的に学べるような授業を工夫改善。
- 興味付け、ポイントを押さえての理解を心がけ、生徒が自発的に取り組めるような授業づくり。
- 生徒の実態把握と計画性。（計画通りに進めたいが、遅れがちになってしまう）
- 「分かった」ということの確認。発問、テスト等での確認。



今後より必要なこと ②

- 小1～中3までのどこでつまづいているのかの調査をする。**到達度検査**の問題を作成し、どの程度の学習力があるかをつかんでいきたい。
- **手話表現力、手話読解力**の向上→生徒の自由なコミュニケーション。
- 生徒個々の教科の**ケース会**（共通理解のため）
- 思春期、青年期の発達学習。「自立のために必要な学力とは」学力論の討議。**到達目標**の確認。これだけは分からせたいという思いと**そのために必要な取組と実践**。
- 生徒ひとり一人の実態に応じて、**社会自立**を意識付け、**勤労意欲**を高めたい。



手立てのキーワード

- 教師の意識として

分かりやすい ほめる ポイント 丁寧さ
イメージ化 具体性 視覚 能率
考えさせる 繰り返し 確認

- 生徒の意識に対して

楽しい 興味・関心 やる気 見通し 自信
主体性 集中力